

広島大学学術情報リポジトリ  
Hiroshima University Institutional Repository

|            |   |
|------------|---|
| Title      | 猫と犬、そして撫でるという幸せ   |
| Author(s)  | 松本, 舞   |
| Citation   | 表現技術研究 , 16 : 1 - 15  |
| Issue Date | 2021-03-31  |
| DOI        |   |
| Self DOI   | <a href="https://doi.org/10.15027/50857">10.15027/50857</a>                                       |
| URL        | <a href="https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00050857">https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00050857</a> |
| Right      |   |
| Relation   |   |



# 猫と犬、そして撫でるといふ幸せ

松本 舞

## I. 猫 vs 犬

### The Prayer of The Cat

By Carmen Bernos de Casztold (1919-1995)

Translated from the French by Rumer Godden

Lord,  
I am the cat,  
It is not, exactly, that I have something to ask of You!  
No –  
I ask nothing of anyone –  
but,  
if You have by some chance, in some celestial barn,  
a little white mouse,  
or a saucer of milk,  
I know someone who would relish them.  
Wouldn't You like someday  
to put a curse on the whole race of dogs?  
If so I should say,  
AMEN

### ねこくんのお願い

カルメン・ベルノス・デ・ガッツトウルド

かみさま、  
ぼくはねこです。  
げんみつにいうと、あなたさまになにかおねがいがあるというわけではないんです！  
にやいんです、けど……。

だれにもなにもおねがいはしません……  
でも、  
もしもあなたさまがなにかのはずみで、てんごくのどこかの納屋のなかに

ちっちゃな白いねずみ、もしくは  
ひとさらぶんのミルクをおもちなら、  
それをおいしいとおもってたべるやつを紹介しますよ。  
いつか、イヌ族ぜんぶに  
のろいをかけてくださらないでしょうか？  
そうしてくださったら、ぼくはいいますとも、  
アーメン、かくあれかし、と。

Twelve Songs, V  
by W. H. Auden (1907-1973)

*DOG* The single creature leads a partial life,  
Man by his mind, and by his nose the hound;  
He needs the deep emotions I can give,  
I scent in him a vaster hunting ground.

*CATS* Like calls to like, to share is to relieve  
And sympathy the root bears love the flower;  
He feels in us, and we in him perceive  
A common passion for the lonely hour.

*CATS* We move in our apartness and our pride  
About the decent dwellings he has made:

*DOG* In all his walks I follow at his side,  
His faithful servant and his loving shade.

十二の歌、第五歌

W・H・オーデン

犬 単独で生きるのでは、満ち足りた一生は送れない、  
人は頭で、犬は鼻で、過ごすのだけれど。  
人には、僕が与えることのできる深い感情が必要だ。  
私は、人の中により広い狩場を嗅ぎつける。

猫たち 似た者は似た者に呼びかける、分かち合えば楽になるし、  
根が持つ感応性は、花を愛するものよ。  
人は私たちの中に、私たちは人の中に看取するの、

孤独な時間への共通の熱望を。

猫たち 私たちは、少し離れて、そしてプライドを持って、  
人が作った上品な住まいの周りで生活するわ。  
犬 人が歩くところはどこへでも、僕は彼のそばについて行く、  
忠実なしもべ、そして彼の愛する影として。

### 犬族ぜんぶに呪いを？

この論文では、猫の天敵ともされる、犬との関係を見ていきたいと思います。さて、先に挙げた詩は「犬族全部に呪いを」という、なんとも身勝手な、過激なお祈りです。

実はこの詩、カルメン・ベルノス・デ・ガッツトウルド (Carmen Bernos de Casztold, 1919-1995) の『箱舟からのお祈り』(*Prayers From the Ark*) と題された詩集に収録されていて、ほかの動物のお祈りと比較すると、とても猫らしい一面が垣間見られるものとなっています。この詩集は、創世記のノアの箱舟のエピソードをモチーフに、さまざまな動物がノアの箱舟の中から神にお祈りを捧げている設定になっています。ノアのお祈り以外に雄鶏、猿、フクロウ、犬、ハチ、ヤギ、蛍、象など、26種類の動物のお祈りが収録されており、「ネコ君のお祈り」はそのうちの二番目に掲載されています。

ここでは大人になるかならないか、まだ我がまま盛りの猫のイメージであえて「ネコ君」と訳してみました。他の動物たちが箱舟の中で神に祈るのを横目に、ネコ君は神へのお願いはない、といいながら、あえて言うならば、という体裁で「ちっちゃな白いねずみ」(‘a little white mouse’, l. 8) と「ひとさらぶんのミルク」(‘a saucer of milk’, l. 9) がほしい、と結局言っています。神様が、「てんごくの・・・納屋」(‘celestial barn’, l. 7) に取り置きしてあるものだから、ネズミも、そしてミルクも、白いイメージが伴っているのでしょうか。ここで「それをおいしいとおもってたべるやつ」(‘someone who would relish them’, l. 10) というのは、もちろん自分のことです。ここでは、ねずみを食べるという殺生が神様への祈りの中で正当化されていますね。ちなみに、この詩集には、「ねずみのお祈り」(‘The Prayer of the Mouse’) と題された詩も収録されていて、鼠は、「私は小さくて薄汚いもの」(‘I am so little and grey’, l. 1) に過ぎない存在だ、と祈りを始めています。神様の納屋に住む鼠が「白いねずみ」として表現されていたのに対し、此の世に住む鼠の祈りの中では、自身は「灰色」で薄汚いものだと表現されています。さらに鼠は、神が自分を小さくて追われる身に作ったことを述べ、最終的には「自分の飢えのわずかな収入をください、／緑色の目をしたあの悪魔／のカギ爪から守って」(‘Give me my hunger’s pittance / safe from the claws / of devil with green eyes’, ll. 11-13) ください、と祈っています。おそらくこの悪魔とは猫のことでしょう。「カギ爪」(‘the claws’) という表現も、鼠に襲い掛かる猫の鋭い爪を連想させます。また、緑の目(‘green eyes’) は、シェイクスピアの『オセロウ』の3幕3場でイアーゴウが言う「緑色の目をした怪物」(‘green-eyed monster’) を想起させる、伝統的な嫉妬の表象です。猫は嫉妬にまみれた悪魔の化身でもあると言えるかもしれません。

さて、ネコ君のお祈りに戻りますが、彼は、お祈りを「いつか、イヌ族ぜんぶに／のろいをかけてくださらないでしょうか？」（‘Wouldn’t You like someday / to put a curse on the whole race of dogs?’, ll. 11-12）と結んでいます。イヌ族によっぼど恨みがあるご様子のネコくんですが、ノアの箱舟の中での神様の祈り、という文脈でこの詩を読み返すと、このお祈りはいかなものか、という気もしてきます。しかも、この詩集の別の箇所、犬の方は利他主義（altruism）の典型のような祈りを捧げています。彼は、人間の家を守り、羊を守り、忠実で、人間の道をよける、と蹴られることも甘んじて受け止めます。そして彼は最後に、「主よ／私を死なせないようにしてください、／彼らのために、／すべての危険が追い払われるまで。」（‘Lord, / do not let me die / until, for them, / all danger is driven away’, ll. 20-23）と願うのです。なんと健気なんでしょう！それに比べて、ネコ君のお祈りは、なんと自分勝手なんでしょう！しかもネコ君は、白いネズミを食べてやると、堂々と殺生の宣言までしてしまっているのです。ただ、この自分勝手さこそが、裏がえせば、猫の媚びない、孤高の精神として賞賛される個性でもある。T・S・エリオットの「猫様に話しかける作法」（‘The Addressing of Cats’）と題された詩の中で、猫が誇らしげに言う滑稽なほど自明の言葉、「猫は犬ではない」（‘A CAT IS NOT A DOG’, l. 19）が表しているのは、自分たちはあの卑屈でへこへこした、ご機嫌取りの犬族とは違うのだという宣言めいた猫の矜持なのです。<sup>1</sup> そして、だからこそ、彼らのツンデレに猫好きはやられてしまうわけです。

## ノアの箱舟と猫

ノアの箱舟に猫が乗っていたか否か、という議論は昔から行われています。肯定派の一説によると、ねずみを追いかけて最後に飛び乗ろうとした猫が、ドアにしっぽを挟まれて切れてしまい、マンクスという品種になった、とも考えられています。<sup>2</sup> 同じようにしっぽが短いのは、日本では、ジャパニーズ・ボブテイル。こちらは、猫のしっぽが長いと猫又という化け物になって人を取り食うと考えた日本人が、幼いうちに猫のしっぽを切ったのが原因です。

また、ロシアには、ノアの時代には猫はまだいなかったけれども、箱舟をかじって、あらゆるものを滅ぼすためにネズミに変身した悪魔をみたライオンがくしゃみをして、鼻から猫が出現した、という伝説も残っています。悪魔がどれほど強くても、獣の王であるライオンから生まれた猫には勝てなかったとのこと。それで、「猫の毛皮は清らか、教会にはいることができる」という言葉が残っているそうです。<sup>3</sup>

---

<sup>1</sup> T. S. Eliot, *Old Possum's Book of Practical Cats*, p. 53. ミュージカル『キャッツ』では、この言葉はリフレインになっており、このAはBではない、という当たり前の不等式に含みがあることを感じさせます。

<sup>2</sup> マンクスの伝説については、モリス『キャット・ウォッチング 2』225-227頁、Alderton, pp. 105-106を参照。また、重松清はこの伝説に着想を得て、「尻尾のないブランケット・キャット」という短編を書いています。『ブランケット・キャッツ』113-162頁を参照。

<sup>3</sup> 日本民話の会/外国民話研究会編訳『世界の猫の民話』35-37頁を参照。

## 猫と犬の伝説

日本の民俗学者、関敬吾（1899-1990）は、猫と犬との間にまた別の物語を見出しています。「犬と猫」と題された短編の中では、一人の正直者の若者が奪われた宝の玉を、その若者に飼われていた犬と猫がとり返しにいくという話が描かれています。若者はこの玉を奪われたために、病に伏してしまいます。犬と猫は協力してその宝の玉を取り返す約束をしていたのですが、旅の途中、食いしん坊の猫が狩りに精を出して、鼠や小魚を手にいれます。猫の手中にある鼠の親鼠や、小魚の親と思われる大きな魚と駆け引きを行い、猫は宝の玉を取り返すことに成功します。猫は自分の手柄だと言わんばかりに、犬との約束を忘れ、まっすぐに病に伏した主人のもとに持ち帰り、主人はもとの元気を取り戻します。それ以降、「猫は玉を取り返した手柄のごほうびとして、朝夕、主人や家族たちのひざの上にも坐ることがゆるされ、おいしい食べものも与えられて、いっそうかわいがられるようになった」一方で、「遅れて帰った犬は、敷居さえまたが去られず、軒下の小屋に寝とまりするのがせいぜいで、猫にくらべて、たいへん粗末なあつかいを受けなければ、ならぬ」くなったと言われています。これは沖縄での物語で、仲がわるいことを沖縄では「犬（イン）と猫（ミャー）」という諺があることを関は伝えています。<sup>4</sup>

## 犬が入れない島？

2015年ごろからネコブームと言われ、最近では、離島が猫の島として取り上げられることがあります。この猫島は一時的なブームによって仕立て上げられたものではなく、以前から存在します。民俗学者の柳田國男（1875-1962）は「猫の島」と題したエッセイの中で、現在でも猫島と呼ばれる陸前田代島が猫の島であると述べています。<sup>5</sup> 柳田は「犬を連れて渡ると祟りがある」ために、犬を入れないというエピソードも紹介しています。犬を連れて渡って行ってはならぬ島としてほかに伊豆の式根島、安芸の厳島の別島黒髪という所などを挙げています。十分な根拠はないものの、犬を寄せ付けない最初の理由は、島を墓場にする習慣があったからであろうと柳田は推測しています。以前は火葬ではなく、柩を地上において、亡骸が自然に消えていくものを待たらしく、獣類、とくに犬などが近寄らないようにしていたのではないかと述べています。

穀物を貯蔵し、蚕を飼育し、魚をとる島国の日本では、西洋に比べると、ネズミ捕りの能力を買われた猫の地位が高く、犬の地位が低かったのかもしれませんが。<sup>6</sup> 関敬吾の民話で示されるように、猫は家の中、犬は家の外、という図も日本では見られます。また、柳田國男が言及しているように、犬を決して入れない島がある一方で、日本全国には猫が神として祀られている神社もあります。鹿児島市の島津氏の別邸仙巖園の一角には「猫神」と呼ばれ

<sup>4</sup> 関敬吾「犬と猫」浅田次郎編『猫のはなし』98-102頁を参照。

<sup>5</sup> 柳田國男「猫の島」谷崎潤一郎ほか『猫は神さまの贈り物』134-148頁を参照。

<sup>6</sup> 桐野作人によると、江戸時代には養蚕現場において、猫が重用されたことを指摘しています。鼠捕りの才能を買われ、とりわけ鼠害の高じた年などは、猫が高価格で取引されたことが論じられています。桐野作人『猫の日本史』189-191頁を参照。

る祠があります。また、東京にも自性院、源通寺、今戸神社、豪徳寺といった猫の聖地と呼ばれる場所があります。京都の丹後峰山にある金刀比羅神社は丹後ちりめん発祥の地であり養蚕も盛んであったため、猫が重要視され、「狛犬」ではなく、「狛猫」があるとのこと<sup>7</sup>です。

## 忠実か？孤独か？

カルメン・ベルノス・デ・ガッツトウルドの「犬のお祈り」でも犬がいかに忠実かが描かれていましたが、W・H・オーデンの詩「唯一の生き物」(‘The Single Creature’)と題された詩の中では、孤独を愛する猫たちと対比的に人間に追従する犬たちが描かれています。「私たちは、少し離れて、そしてプライドを持って、／人が作った上品な住まいの周りで生活するわ」(‘We move in our apartness and our pride, / About the decent dwellings he has made’, ll. 9-10)、とプライド重視の猫に対し、犬は「人が歩くところはどこへでも、僕は彼のそばについて行く、／ 忠実なしもべ、そして彼の愛する影として」(‘In all his walks I follow at his side, / His faithful servant and his loving shade.’, ll. 11-12)と言います。人間に寄り添う猫が「孤独な時間への共通の熱望を。」(‘A common passion for the lonely hour’, l. 8)を見出しているのに対し、犬は、人間の狩りの伴侶として、より広い狩場(‘a vaster hunting ground’, l. 4)を嗅ぎつけるというも対照的です。換言すれば、この「犬は集団行動、猫は単独行動という違い」に関連して、今泉は『猫脳が分かる！』の中で面白いことを言っています。「ペットとしてよく比較されがちな犬と猫ですが、犬の方が賢いと思われている人もいることでしょう。犬は陽気で(おおむね)、人の言うことを聞く(おおむね)から、猫よりも賢く見えがちですが、一般に知られる知能としては、犬も猫もほぼ同じなんです。猫が犬のようにしつけられないのは、人の言うことがわからないからではありません。」<sup>8</sup>確かに、人の命令によく従うこと、「よく言うことを聞く」は必ずしも頭がいいということではない。分かっているのに反抗する。こちらの方がもっと賢い。猫派の穿った論理かもしれません。

さて、忠実さを誇りに思う犬たちと、ただそこにいることで人間の孤独に寄り添う猫たち。オーデンの言葉を借りるならば、猫が人間と共有する「孤独な時間への共通の熱望」というものが一体どのようなものなのか、次に、猫が人間に与えてくれる温もりについてみていきたいと思います。

## II. 猫と触覚

From ‘To a Cat’

By A. C. Swinburne (1837-1909)

<sup>7</sup> 桐野作人『猫の日本史』168-172頁を参照。

<sup>8</sup> 今泉忠明『猫脳がわかる！』136頁。

I

Stately, kindly, lordly friend,  
    Condescend  
Here to sit by me, and turn  
Glorious eyes that smile and burn,  
Golden eyes, love's lustrous meed,  
On the golden page I read.

All your wondrous wealth of hair,  
    Dark and fair,  
Silken-shaggy, soft and bright  
As the clouds and beams of night,  
Pays my reverent hand's caress  
Back with friendlier gentleness.

Dogs may fawn on all and some  
    As they come;  
You, a friend of loftier mind,  
Answer friends alone in kind.  
Just your foot upon my hand  
Softly bids it understand.

(ll. 1-18)

「猫に」より

A・C・スインバーン

堂々として、情け深く、気高い友よ、  
    ここに、私のそばに  
どうかお座り下され、そして  
微笑み燃える、光輝くまなざしを、  
黄金の瞳、それは愛の輝く報酬、それを  
私が読む黄金の書物のうえに向けたまえ。

あなたの驚くべき、豊かな毛はすべて、  
    濃く、そして美しく、  
夜の雲と光のように



柔らかく輝いて、絹のようなモフモフで、  
敬意を表す私の手が愛撫すると  
もっと友好的な優しさでお返ししてくれる。

犬たちは、来る者誰にでもかれにでも  
みなじゃれつく。  
あなたは、より高邁な精神の友、  
応ずるのは同族の友にのみ。  
ただ、あなたの足が私の手の上に置かれれば、  
それは、やわらかく、私の手に理解せよと命じるのだ。

A・C・スィンバーン (A. C. Swinburne, 1837-1909) は、「堂々として、情け深く、気高い友よ」と高貴な人物であるかのように、猫に呼びかけます、自分の傍に来て座って欲しい、と。詩人はどうやら本を読んでいるようです。何の書物かはわかりませんが、それが黄金色なのは、黄金色の猫の眼差しが向けられているからでしょうか。触るものがすべて黄金に変わるギリシア神話のミダス王のように、愛する猫が見つめるものや触るものはみな、どんな平凡な日常のものでも、特別なものになる。猫の「黄金の瞳」は、一種の「愛の輝く報酬」であり、猫がそばにいてくれるだけで、詩人が読んでいる本が光り輝くのだというわけです。

第一連では、瞳に焦点が当てられています、次の連になると、詩人が語りかけている猫の全体像が見えてきます。猫の毛が「夜の雲と光」のようだと詩人は言います。‘Silken-shaggy’ (l. 9) という表現は、あえて「絹のようなモフモフ」と訳してみました。ノルウェージャン・フォレストキャットかメインクーンなどの毛長種を想像させますね。そして詩人がそっと手を触れると、愛情に満ちた猫の毛の柔らかさ、その毛のモフモフが「もっと友好的な優しさ」を返してくれます。第一連では、書物をのぞき込む、神秘的ともいえる猫の目、そして第二連では詩人の愛撫に無言で応える猫の毛の柔らかさが伝わってくる、感覚に訴える表現になっています。

そして第三連では、猫は、犬よりも「より高邁な精神」を持った友であると詩人はいいます。だれかれ構わずじゃれつく犬と心の通った、選ばれた友だけを愛する猫が対比的に描かれている。そして、「ただ、あなたの足が私の手の上に置かれれば／それは、やわらかく、私の手に理解せよと命じるのだ。」と言います。猫は、犬のように騒がしく吠えたり、はあはあとよだれを垂らしたり、しっぽを振ったりして愛情を表現するわけではありません。ただその足を触れさせるだけで友と認める人間への愛情を「理解せよ」と、無言で語りかけてくるのです。この猫と人間との共感、神秘的でさえあって、17世紀の形而上派詩人ジョージ・ハーバート (George Herbert, 1593-1633) が「祈り」の一つの定義として、神とキリスト者との共感を暗示して「何か理解されたもの」(‘something understood’, ‘Prayer (I), l. 14) と言ったのを想起させます。猫の暖かく柔らかい肉球に触られたことのある飼い主には、うまくは表現できないけれども、よくわかる感覚です。この表現は、ミュージカル『キ

ヤッツ』のグリザベラの有名な歌「メモリー」の一節をも思い起こさせます。「もしもあなたが私に触れるなら、／あなたは幸せとは何かを理解するでしょう」（If you touch me, / You'll understand what happiness is', Andrew Lloyd Weber, 'Memory', ll. 41-42）とグリザベラは歌います。娼婦猫グリザベラの台詞ですから、もちろん性的な愛撫による快感という意味も含まれていると思われませんが、猫を触ることで得られる幸せがいかに大きいのか、そしてそれは、猫に触られることでしか理解できない特別で不思議な感覚を再認識させる表現ともなっています。ある意味、猫の存在意義は撫でられてなんぼ、なのかもしれません。猫のペット化は、中世でも修道院を中心に盛んだったようですが、教皇グレゴリウス 1 世は、「ほかの何よりも猫を撫でることをお好みになる」と言われたそうです。<sup>9</sup>

しかしながら、これもしたかな猫の作戦かもしれません。ギャリコの『猫語の教科書』では、人間の真面目の感覚が逆にとられています。教師役の猫の語り手は、食べたいものをおねだりするときの作戦として、男性のひざかひじを前足でトントンたたく方法を伝授しています。爪を出さずにそっとつつくトントンは、男性と猫とだけの秘密であり、そこからもっと親密な関係が生まれて、男性は猫の要求に応じてくれるはずだ、と力説します。また、語り手の猫は、次のようにも言っています。

・・・それから前足を使うのもいいわ。なぜかわかりませんが、足で人の顔に触ると喜ばれます。もし人の頬とかあご、鼻を前足でちょっとのあいだ抱きかかえるようにするか、または片足でも両足でも人の首に巻きつけて、ちょっぴりゴロゴロいいながら頭を頬にすりつけてもしたら、もうたいへん。うれしさのあまり恍惚としちゃうわよ。猫はただ頭を搔いているだけなのに、人間はこれを熱い愛のしるしと受け取って、猫と深く結ばれているという気分になっちゃうみたい。<sup>10</sup>

### もふもふの幸せと猫の触感

夏目漱石は『吾輩は猫である』の中で、暑さに辟易する吾輩に、夏には毛皮を質屋に入れたいくらい、といわせていますが、人間のほうは、その猫の毛皮の、その毛のモフモフに幸せを見出します。角田光代は愛猫トトをシャンプーした後に顔を押し付けるエピソードを次のように述べています。

タオルドライされ、ドライヤーで生乾きにされたトトは、通常の三分の一ほどに縮んでいる。つくづく猫というものはもふもふ毛の生きものなのだなあと、この縮んだトトを見るたび実感する。トトは執拗に自分の体をなめ、なめ、なめまくる。

ようやく毛の乾いたトトに近づき、顔を押し当てると、いつものもふもふ感に最上級をつけたくなるほどのすべらかさ。そして、うちにやってきたころのような清潔で甘やかないいにおいがする。「あー」とため息が出る。夫もトトの背や腹に顔を埋め「あー」

<sup>9</sup> デズモンド・モリス『猫の美術史』34頁。

<sup>10</sup> ポール・ギャリコ『猫語の教科書』92-94、108頁。

と言う。交互においを嗅いで「あー」「あー」、と呆けたようになる。阿呆にならざるを得ないような触感とおいなのだ。<sup>11</sup>

フランスの詩人、ボードレール (Charles-Pierre Baudelaire, 1821-1867) も、猫の「金いろと栗いろの毛皮から／実にやさしい香りが出る」ことに気付いており、その「頭から足の先まで、／微妙な空気が、危険にみちた甘い香りが その褐色の／体のまわりに漂っている」、とまで言っています。<sup>12</sup> 猫が与えてくれるこの触覚と嗅覚の喜びは、最近では「ネコ吸い」という言葉を猫好きの間で流通させるほどになっています。<sup>13</sup> 「この世界に無数に存在する」ネコ吸い人たちのことを、表象精神病理学者の斎藤環は、「猫の常習吸引者」と呼んで、「この、猫には必ずしも歓迎されない吸引行為に対する執着」が、「女性身体ないしその付属物に対するフェティシユな執着に限りなく近い」、「いわゆる『モフる』対象が女性の乳房のメタフォリカルな代替物にほかならない」、という仮説を提唱しています。<sup>14</sup>

また、『ねことじいちゃん 2』の中で、死んだおばあさんが病気で入院したときのエピソードも、猫の毛の触感がいかに大きな癒しを与えてくれるかを再認識させるものとなっています。タマが病院にいる自分のことを探し回っていることをじいちゃんから聞いたおばあさんは、「エアータマ」「タマに会いたいつ」と言いながら、そこにはいないタマを抱きかかえ撫でるそぶりをします。<sup>15</sup> 猫の感触というものは、たとえそこには実際にいない状態であろうとも、猫に寄り添う人には、あたかもそこに存在するものとして感じる事ができるものなのです。

猫を撫でるときに私たちが感じる、あの曰く言い難い感触には一種の電氣的なものが作用しているのだとも詩人たちは表現してきました。例えば、イギリス 18 世紀の詩人クリストファー・スマート (Christopher Smart, 1722-71) は、「猫を撫でることによって、電気を発見した」(by stroking of him I have found out electricity)、と言うだけでなく「その電氣的な炎は、人と獣の体を維持するために神が天から送った、靈的な物質である」(the Electrical fire is the spiritual substance, which God sends from heaven to sustain the bodies both of man and beast) とまで書いています。<sup>16</sup> また、ボードレールの詩「猫」の一節を安藤元雄は、「私の指が暇にまかせて おまえの頭や しなやかな／おまえの背中を撫でるとき、／私の手が 快楽に酔いしれながら 電気を帯びた／おまえの体をまさぐるとき」、と訳しています。<sup>17</sup> ただ、もちろん、皆が皆、猫好きで猫の肌触りで幸せを感じ

11 角田光代『今日も一日きみをみてた』122-123 頁。

12 ボードレール『悪の華』95、136 頁。

13 坂本美雨『ネコの吸い方』。「ネコ吸い」の定義の一つは、「ネコの体の様々な部位に顔をうずめ、心を無にし、深く呼吸をすること」です。「顔で、毛並みのやわらかさを堪能してください」とも指示があります。作者は、音楽家、坂本龍一の娘。

14 斎藤環「欠如ゆえの愛」『現代思想 3 月臨時増刊号 imago 総特集 猫』93 頁。

15 ねこまき『ねことじいちゃん 2』95 頁。

16 Christopher Smart, *Jubilate Agno*, p. 105.

17 ボードレール『悪の華』94 頁。

るわけではないことも確かです。宮沢賢治は、「猫」という断章の中で、「アンデルセンの猫を知っていますか。／暗闇で毛を逆立ててパチパチ火花を出すアンデルセンの猫を」、と問いながら、彼の猫否認の一端をのぞかせています。

猫は停ってすわって前あしでからだをこする。見てみるとつめたいそして底知れない変なものが猫の毛皮を網になって覆ひ、猫はその網糸を延ばして毛皮一面に張ってゐるのだ。

(毛皮といふものは嫌なもんだ。毛皮を考へると私は変に苦笑ひしたくなる。陰電気のためかも知れない)<sup>18</sup>

賢治の猫嫌いの根本は、「猫のからだの中を考える」と吐き気がするということらしいのですが、確かに、猫の触感は、毛皮の向こう側のことを伝達するわけで、それ故に生き物に付きまとう本質的な淋しさを感じることできる小池昌代のような詩人もいます。彼女は、「ねこぼね」と題した詩の冒頭で次のように言っています。

猫を撫でてみた。すると、毛ではなく、肉でもなく、骨のかたちが  
てのひらへ残る。

あったかいくぼみやでっぱり。その、でこぼこ。あ、これが猫。  
こぼれそうにしなやかな、これが、とくべつのさびしさか。  
骨と骨をやわらかくつないで、いきものよ。<sup>19</sup>

### 猫の手の魅惑

スインバーンは、猫の柔らかい手が自身の手の上に置かれたときに伝わる、猫のメッセージについて表現していましたが、日本の俳句では、猫の手（もしくは足）そのものが観察されています。猫の足跡は「梅ばち」模様などと称され、江戸期でも「梅の花」に喩えられました。

あれを見よ 猫の足あと こぼれ梅  
初雪や 猫の足あと 梅の花

これらの句は『知られぬ日本の面影』の中で小泉八雲が取り上げています。八雲は、「男の子も女の子もみな猫の足跡と梅の花を比べて読んだ詩を知っている」と言っています。<sup>20</sup>

猫の手に対する日本人の観察眼は、筒井祥文の「こんな手をしてると猫がみせにくる」と

<sup>18</sup> 『ユリイカ 平成22年11月号』119頁に引用。

<sup>19</sup> 川口晴美編『名詩の絵本』72頁。

<sup>20</sup> 桐野作人『猫の日本史』262-263頁。

いう現代川柳にも表れています。<sup>21</sup> 飼い猫が出し抜けにひょいと飼い主の体に手をかけてくる時の手の柔らかさやかわいらしさがあふれています。「猫の手も借りたい」という忙しいときに私たちが使う決まり文句の中で前提とされている、役に立たないものの代名詞である猫の手が、いかに人の心を癒す役に立っているかを示す、見事な川柳だと思います。

また、『ノラヤ』の中では、いなくなってしまったノラ探索中に百間宅に居ついたクルツ(クル)の手を見ながら、百間は次のように語りかけています。

「クルや、お前は猫だから、顔や耳はそれでいいが、足だか手だかしらないけれど、その裏のやはらかさうな豆をこっちに向けてと、あんまり猫猫して猫たることが鼻につく。そつちへ引っ込めて隠しておけ。」<sup>22</sup>

百間は「あんまり猫猫して」といと表現していますが、猫の手(もしくは足)の裏の肉球を見て、百間がとても可愛らしく思っていることが伝わってきます。また、次のようなエピソードも、百間が猫の手をつぶさに観察していることから描かれたものでしょう。

私は起きだして寢床を離れる時、必ずクルに口を利く。眠つてゐるクルの額に私の顔を押し付け、手でクルの胴を抱へながら話し掛ける。クルにはクルのにはほひがする。

「クルやお前か」

咽喉の奥のほうで「うんうん」と云ふような声をする。眠つてゐながら返事をするつもりなのだろう。

「クルやお前か、さうやって寝んねしてゐるのか」

「うんうん」と云ひながら小さな手を伸ばして、手の先の爪のある指の間をみんな広げて見せる。

「クルや、お前は利口だねえ。さうやってお利口に寝んねしてゐるのか。クルやお前か」

今度は顔を自分の両手の間に抱へ込む様にして、くるくるつと丸く、細螺の貝の恰好になつて、すうすうと鼻息を立てる。私が構っている間ぢゆう、一度も目は開かない。<sup>23</sup>

「小さな手を伸ばして、手の先の爪のある指の間をみんな広げて見せる」という記述は、今風の言い方をすれば、「猫のグーパー」でしょうか。いずれにせよ、クルに寄り添って猫の手とその温度を感じ取っている百間の姿が浮かんできます。何度も何度も「クルやお前か」と念を押している作者は、目の前にいるクルツが、いなくなってしまったノラではないことを確認して残念がっているのか、それともクルツ、お前もまた自分の前から消えてしまいはしないだろうね、という存在確認なのか。実際、後にクルツもいなくなってしまう。そ

<sup>21</sup> 倉阪鬼一郎『猫俳句パラダイス』46頁。

<sup>22</sup> 内田百間『ノラヤ』211・212頁。

<sup>23</sup> 内田百間『ノラヤ』241頁。

して、再び猫の帰りを淋しく待つ百間の耳に、空耳かもしれない猫の子鈴の音が聞こえた時、この場面で繰り返されていた「クルやお前か」という言葉が、今度は実体のない、触ることの出来ない猫に対して使われます。「クルやお前か。お前の鈴の音だろう」、と。<sup>24</sup> 存在と触覚と愛が、いかに深く結びついているかを教えてください。

## 参考文献

- Auden, W. H. *Collected Shorter Poems 1927-1957*. 1966; London, Faber and Faber, 1972: 160.
- Bukowski, Charles. *On Cats*, ed. Abel Debritto. 2015; Edinburgh, Canongate Books, 2016: 109-110.
- Cat Poems by the World's Greatest Poets*. London: Serpent's Tail, 2018.
- Carr, Samuel. *The Poetry of Cats*. London: Chabcellor, 1991.
- Eliot, T. S. *Old Possums Book of Practical Cats*. London, Faber and Faber, 1939.
- Fragos, Emily. *The Great Cat: Poems about Cats*. London: Everyman, 2005.
- Gasztold, Carmen Bernos De. *Prayers from the Ark*. London: Pan Books, 1947.
- Herbert, George. *The English Poems of George Herbert*. Ed. Helen Wilcox. Cambridge: CUP, 2007.
- Lillington, Kenneth. *Nine Lives: An Anthology of Poetry and Prose Concerning Cats*. Jolly & Barber: London, 1977.
- Morris, Desmond. *Catwatching*. Crown: New York. 1986.
- . *Catlore*. Crown: New York. 1988.
- Shakespeare, William. *The Riverside Shakespeare*. Ed. G. Blakemore Evans. Oxford: OUP, 1972.
- Smart, Cristopher. *Jubilate Agno*, in *The Book of Cats*, ed. George MacBeth and Martin Booth : Newcastle upon Tyne: Bloodaxe Books Ltd, 1992.
- Swinburne, A. C. *The Collected Poetical Works of Algernon Charles Swinburne*. 1904; London, William Heinemann, 1919-1920, 6 vols.: vol. 6, 255.
- Thomas, Edward. *Edward Thomas: Collected Poems and War Diary, 1917*, ed. George Thomas. London, Faber and Faber, 2004: 68.
- Topsell, Edward. *The Historie of Foure-Footed Beastes Describing the True and Lively Figure of Every Beast*. London, 1607.
- . *The Historie of Serpents. Or, The Second Booke of Liuing Creatures Wherein is Contained Their Divine, Naturall, and Morall Descriptions*. London, 1608.

---

<sup>24</sup> 内田百閒『ノラヤ』298頁。



浅田次郎、日本ペンクラブ編『猫のはなし—恋猫うかれ猫はらみ猫』（角川文庫、2013年）  
今永忠明『飼い猫のひみつ』（イースト新書、2017年）  
今永忠明『猫脳がわかる！』（文春新書、2019年）  
内田百閒『ノラヤ』（中公文庫、1980年）  
河合隼雄『猫だましい』（新潮社、2000年）  
角田光代『今日も一日きみを見てた』（角川書店、2015年）  
角田光代、萩原朔太郎、村上春樹他『猫なんて！—作家と猫をめぐる47話』（キノブックス  
編集部、2016年）  
角田光代、吉田修一、村山由佳ほか『ものを書く人のかたわらには、いつも猫がいた—NHK  
ドキュメンタリー 猫も杓子も。』（河出書房新社、2019年）  
川口晴美編『名詩の絵本』（ナツメ社、2009年）  
桐野作人編『猫の日本史』（洋泉社、2017年）  
倉阪鬼一郎『猫俳句パラダイス』（幻冬舎新書、2017年）  
『現代思想 imago 総特集 猫！』（青土社、2016年）  
斎藤環『猫はなぜ二次元に対抗できる唯一の三次元なのか』（青土社、2015年）  
坂本美雨『ネコの吸い方』（幻冬舎、2014年）  
重松清『ブランケット・キャッツ』（朝日文庫、2011年）  
田中貴子『猫の古典文学誌 鈴の音が聞こえる』（講談社学術文庫、2014年）  
谷真介編『猫の伝説 116話—一家を出ていった猫は、なぜ二度と帰ってこないのだろうか？』（  
新泉社、2013年）  
谷崎潤一郎、寺田寅彦、大佛次郎他『猫は神さまの贈り物 エッセイ編』（実業之友社、2014  
年）  
日本民話の会/ 外国民話研究会編訳『世界の猫の民話』（ちくま文庫、2017年）  
『ねこ新聞』監修『ねこは猫の夢を見る』（『ねこ新聞』編集部、2008年）  
『ねこがいっぱいねこアート』（青幻舎、2018年）  
ねこまき（ミュージワーク）『ねことじいちゃん』（KADOKAWA、2015年）  
ねこまき（ミュージワーク）『ねことじいちゃん 2』（KADOKAWA、2016年）  
佛淵健悟・小暮正子編『俳句・短歌・川柳と共に味わう 猫の国語辞典』（三省堂、2016年）  
堀江珠喜『猫の比較文学（猫と女とマゾヒスト）』（ミネルヴァ書房、1996年）  
松本舞「猫と文学—その壱（ヨーロッパ篇）」『表現技術研究論集 13』（広島大学表現技術  
プロジェクトセンター、2018年）  
松本舞「猫と文学—その弐（英詩篇）」『表現技術研究論集 14』（広島大学表現技術プロジ  
ェクトセンター、2019年）  
松本舞「猫と愛の物語—トマス・フラットマンの恋猫、ポール・ギャリコの仔猫のためのマ  
ニュアル、マルチウリアーノの猫のふみふみ」『表現技術研究論集 15』（広島大学表現  
技術プロジェクトセンター、2020年）  
山根明弘『ねこの秘密』（文春新書、2014年）

『ユリイカ 特集 猫—この愛らしくも不可思議な隣人』（青土社、2010年）  
和田博文編『猫の文学館 I—世界は今、猫のものになる』（ちくま文庫、2017年）  
和田博文編『猫の文学館 II—この世界の境界を超える猫』（ちくま文庫、2017年）  
ボードレール『悪の華』（集英社文庫、1991年）  
ポール・ギャリコ『猫語の教科書』（灰島かり訳、ちくま文庫、1998年）  
デズモンド・モリス『キャット・ウォッチング 1—なぜ、猫はあなたを見ると仰向けに転がるのか？』（羽田節子訳、平凡社、2009年）  
デズモンド・モリス『キャット・ウォッチング 2—猫に超能力はあるか？』（羽田節子訳、平凡社、2009年）  
デズモンド・モリス『猫の美術史』（柏倉美穂訳、エクスナレッジ、2018年）

（まつもと まい、広島大学大学院人間社会科学研究科助教）